

## 心理療法における小動物のテーマの治療的意義

——子の親離れ・親の子離れに媒介となるケースをめぐって——

田 畑 治

### I 問題と目的

近年、子どもから成人にいたるまで、さまざまな心理相談が増加し、カウンセリングや心理療法がますます盛んになってきている。筆者は、大学における心理臨床の立場から、自ら心理相談を実践するのみならず、大学院学生が行っているケースのスーパーヴィジョンを行うことも多く、そこでもさまざまな事態にでくわすことがある。

ところで、そのような事例に自ら直接に接したり、事例を報告してくる人の話を聴いていて、治療的に有意義と思われる話題内容でも、わりに見過ごされていることに気づかされることがままある。たとえば、対人的言及にはフォローしていても、それ以外のものの言及にはフォローできていないといった具合である。それらには、たとえば思春期の子どもの場合の童話やマンガであったり、青年期の人の場合の小説や文学、あるいは音楽や宗教であったり、成人の場合の小動物や植物、あるいは趣味や娯楽であったりすることがある。これらを語ることで、それぞれのクライエントは何を感じ、何を伝えようとしているのか。またそれらの話題内容は、一体どのような一貫した治療的意義をもっているのだろうか。これらの話題内容にも聴く態度を養っていく必要はないであろうか。

社会が高度化し、家族が核家族化し、個人は他者から孤立化していく傾向が強まり、対人関係も表面的で稀薄になっていくなかで、人間が感じ入る心理内界に対してカウンセリングや心理療法に携わる人は、もっと相手の心理内界の蠢きに耳を傾け、注目していったよいのではないかと考えられる。

本報告では、前報に(田畑, 1985)に引き続き、中高年婦人の事例をとりあげ、特にそこで持ち出された小動物(ネコと犬)の話題に焦点づけて記述し、あわせてこれらの小動物のもつ治療的意義を考察することを目的とする。

なお本事例の治療面接の構造をあらかじめ記しておく

と、治療面接はクライエントのニーズに合わせてそれぞれ  $1/2W$  または  $1/W$  であり、一回の面接時間は50分で、対面法であった。治療態度は、受容的で非断定的態度を基本とし、できるだけクライエントの対人的言及のみならず非対人的言及にも“波間に平等に漂う注意”(Freud, S.), “一緒に心の旅をする心境”で傾聴していくよう努めた。中高年婦人の場合、話題が入り組み、筋が煩雑になるけれど、以上のような態度で接していくことは、特に望ましいと思われる。

### II 事 例

#### 事 例 C

##### 1. 事例の概要

K. Y. (女子, 24歳8カ月) の母親。来談時54歳。既婚。専業主婦。

##### 1) 主 訴

「娘の家庭内暴力について」という訴えで、娘に内緒での来談であった。

##### 2) 家族構成

4人家族である。父親(会社員, 56歳), 母親, 兄(会社員, 27歳)および本人である娘(無職)である。

##### 3) 問題の発生と経過

来談した母親の報告によれば、およそ以下のようなる。

娘(本人)は、生来「一寸消極的でわがままな子」であり、幼児期、児童期、そして思春期を通じて、神経性習癖(たとえば頻尿、チック、偏食、潔癖など)や登校拒否傾向があったという。

高校時代、入学時の成績はまあまあであったが2学期の成績はガタ落ちになった。兄が当時大学受験を控えており、受験勉強でイライラしており、また一家はその頃家を新築し、転居したことも重なった。本人は新居の2階の一室を仕切り、机や棚などで衝立をした。この頃、母親のいう“家庭内暴力”が始まった。きっかけになったことは、高校側があるコンサートを不許可にし、本人は家で母親に対して「殺されてえのか!」とわめき散ら

していたという。しかししばらくして納まった。

その後、短大に進学し、特に心配した問題もなく、無事卒業をした。そして卒業時に内定していた民間会社に勤務するが長続きせず、けっきょく1年で退社してしまった。その後、自動車免許をとり、市役所などのアルバイトに行くが、父親に「アルバイトではダメだ」と反対されてやめてしまった。母親は、この頃の心境を神棚に祈る気持であったという。

来談した年の始めに、本人がある服飾関係の店員募集に応募し、うまく採用された。しかし両親はその店の待遇が広告内容と違うことに疑念をもち、本人も困っていたが店長に自分で言えず、けっきょく両親が直接店にかけあい、やめさせる破目になった。それからというもの、本人は家に居るあいだは、言葉づかいや行動も荒々しくなっていた。ほんの些細なことをきっかけにして、本人は爆発してしまい、警察沙汰になったこともあった。その後は、生活も乱れ、目下昼夜逆転の生活に陥っている、とのことであった。

母親は、娘にどう対応していったらよいのか、オロオロし、ノイローゼ気味になっている印象であった。

この母親との心理面接は、①母親自身、まずリラックスし、安定していくこと、②娘の行動そのものよりも、気持や考えを重んじること、③家族全体が、いま娘をめぐって新しい節目に差ししかかっており、家族内雰囲気改善をはかっていくことなどを目標としてすすめられた。

## 2. 母親との治療面接過程

心理面接は、某年9月21日（初回受理面接）から、翌年6月2日（#11）まで行われ、母親の申し出で終結した。

ここでは、主題との関連で、母親—本人（娘）—小動物（ネコ）とのかかわりに焦点づけて記述することにする。

#1（初回受理面接）：「事例の概要」にまとめたような訴えに基づいた事実経過が語られる。この回をひと言で特徴づければ「私（母親）は困惑しています」、「娘は“私は（親の）犠牲者だ！”という」である。

ところで、母親は、娘が店をやめてからの、家での最近の様子を語るなかで、この4月からシャム・ネコを飼い、愛称を“ジョージ”と呼んでいることを語った。面接者は、これらを心に留めておき、今後の話題の展開もあるだろうと予想して、この愛玩動物に関心を寄せ、注目することにしていた。

#3（10月22日）：この回には、父親も同伴で来室する。そして父親の来室に対して、面接者は労のねぎらいの挨拶をする。そして、「最近、娘は落ちついてきた。だが積極性がなく、将来どうなるか判らない」との心配

を述べる。他方、母親は、娘が家の中ではタモリの出演しているTV番組を見て、面白おかしくしている。ネコの“ジョージ”ともじゃれて遊んでいるとも述べる。

この回は、両親とも娘のしつけの失敗を反省し、ひと言でこの回を特徴づければ、「雨のち晴の小康状態」であり、他方では娘を「自閉症ではないか」と来談兄とすれ違ってきた子どもに関連させて、母親は怖れを表明した回でもあった。

#4（11月5日）：母親は、相変わらず娘の家の中での状態を語り、“平穏であり、かえって心配である”旨を表明する。戸塚ヨット・スクール公判で、母親が戸塚に同情的発言をすると、娘は「ひどい親をもった子どもは可哀想！」とか「子どもは親を選べない！」と言い、いまでも親に恨みをもっていると嘆く母親であった。そして娘は家から外出したとがらないが、“ジョージ”（ネコ）を兄となぶって楽しんでいる、と述べる。また来月に兄が結婚するけど、娘は式に出たがらない。兄の嫁は、娘と同年である、と母親は気持の迷いを表明した。さらにそのあと、母親自身の家族の生い立ち——特に母親の父は、母親が中学1年次のとき病死し、その後は母の手一つで兄弟6人で育てられたこと——が語られ、一仕切つけられた感じである。

#5（12月17日）：この間、兄の結婚式があり、けっきょく娘も式に出て、受付の手伝いをちゃんとやった。しかしその後、また家ではタモリのTV番組をみたり、“ジョージ”の糞の後仕末をしたりしてゴロゴロしている。先だってよそのネコが空き間から入ってきていて、母親が取り押えたら、そのネコに噛みつかれて、母親は手に出血をした。娘は「医者に行け」とすごく心配し、手当もしてくれた。

この回は、ひと言で表現すると「母—娘の愛・憎の織り混った独立戦争」である。母親は、息子の結婚式を終え、ひととき美しくなり、若返った印象であった。

その後、#6（翌年1月28日）、#7（2月25日）で娘の荒れ具合と生理との重なりを母親は発見し、「魔のX日」という。面接者は、一度専門医の受診を勧めるが母親はかつてから医師不信の念をもっており、けっきょく実行に至らなかった。

#8（3月24日）：母親は、相変わらず昼夜逆転のような生活を繰り返している娘を語り、ひどいときは夕刻4、5時に起床することもあり、あきれている。しかし娘が布製品のパッチ・ワークを完成するのに深夜までかかったようであると、娘を弁護するような発言もしていた。また娘がすでに作ったパッチ・ワークのカゴに“ジョージ”が入って、ちょこんと寝ている。そういうときの娘はご機嫌であるということを語る母親は、ホッと安堵の

様子を浮べていた。

＃9（4月21日）：この回は、母親―娘―ネコをめぐる、大きなやま場に差し加かる。

母親は、＃8以降、娘が比較的安定した毎日であったことを告げたあと、先日、娘に自分が使った台所の食器の後仕末をするよう指摘したら、急に反発し、「てめえは～しているんだ！」と怒ったという。それでも自分はすぐ引っ込んだ。そして“ジョージ”も自分の方に寄ってきたので、自分は「K（娘のこと）を咬み殺してくれんかね」と言ってやった。すると“ジョージ”は、その晩行方不明になった。そして家族全員あちこち探すが見つからなかった。しかし、翌朝、“ジョージ”は娘の部屋に居た。娘はご機嫌で自分も一安心した。また母親が来談の前日（4月20日）に、娘は友だちと彼女の赤ちゃん連れで鳥羽にラッコの親・子を見物しに行き、土産げに伊勢の赤福もちを買って帰った。そして面接後半に娘の将来に対する不安を表明した。娘が精神病ではないか、との恐れを抱いている母親であった。実は、親せきに“うつ病”の人がいることを、母親は心の隅にいつも不安を抱いていることを打ち明けたのである。そして自分自身も気が重くて、家の中で大声を張りあげることがあるとも表明する。

＃10（5月12日）：この回に、母親は、前回話せなかったが、「兄嫁がスピード出産した」と恥しげに話す。そして話題は、また“ジョージ”と娘にうつる。“ジョージ”が怪我をして、爪を痛み、娘は獣医に連れて行ったり、母親にも素直に協力を求めてきたりしていることを表明する。そして、そのように語ったあと、母親は自身の性格が何でも今まで完全癡であったことの洞察と気づきをして行った。娘は、自分のこの完全癡の性格に負担を感じていたことをしみじみ語って帰っていった。自分の性格に反発して、娘が反発していたことも、母親は洞察して行ったのであった。

＃11（最終回；6月2日）：急いで約束時間に馳せ参じた母親は、汗をかきつつ、ここ1カ月間の平穏無事と孫（M坊）の誕生で、家族が“赤ちゃん”を中心に動きはじめた様子を語っていった。娘も“赤ちゃん”に關心を寄せ、パッチ・ワークの<sup>マリ</sup>毬を作ってやると張り切っていると、母親はうれしそうに語ったり、また父―娘2人して“赤ちゃん”を見に行ってきたりしていることも表明した。そして両親の反省として「子どもに下手に出ること」のコツを回想しつつ、これから母親として、娘に手内職を始め、働くことの意味を教えていきたいとも語り、心理相談を終結する旨を表明した。面接者も、この段階での目標をほぼ達成できたとの判断から、この申し出を快諾し、母親に来談への努力をねぎらった。

## 事例 D

### 1. 事例の概要

M. H. 女性 来談時44歳。既婚。ある商品の販売員（パート・タイマー）。

#### 1) 主 訴

「（自分の）迷わない生き方について」とのことであった。

#### 2) 家族構成

4人家族である。夫（会社員、47歳）、本人（妻）、長男（受験浪人2年目、20歳）、長女（高校1年、15歳）である。

#### 3) 問題の発生と経過

本人（妻）の報告によれば、およそ以下のようなものである。

3年前に、本人の父親が脳軟化症で半年位入院する。本人は父親を呼びたかったが、夫が反対し、もめていた。その後1年後に父親は死亡した（享年78歳）。（なお母親も12年前に肝硬変で死亡している（享年58歳）。

その後、夫の転勤でN市に転居する。しかし前の都市H市とちがいが長男、長女の受験で眠れず、「太陽が照り上げたことがない毎日」が続いたという。本人は、この間、内臓疾患も起こし、大学病院を受診したこともある。

今回の来談の直接のきっかけは、2年浪人の長男が大学受験で意欲を喪失し、滅入ってしまっていること、および夫との価値観のちがいで対立し、迷い苦しんでのこととであった。

#### 4) 来談時での総合所見と援助目標

本人は、以下①～④の問題をかかえ、心理的に統合しえないでいると当方は考えた。

①本人の父親を引きとる、引きとらぬで、夫との間に意見のくい違いが生じ、さらに父親の死亡によって、罪悪感をぬぐいきれないでいること。“喪の作業”が必要であること。

②H市から転居して以後、子どもたちの受験を控え、夫の“世間的常識的な価値観”に懐疑的になり、夫婦間に対立・摩擦が顕著になってきていること。

③自分の生い立ちを点検するため、ある男性の人格的影響で、2年前受洗しているが、教会での人間関係のトラブルで不安定になっていること。

④親の精神的自立や子離れができないで、迷っていること。

このような中年女性の人生後半に向けての‘内面的統合’と‘老いに向けての生き方’を模索すべく、基本的には“受容”と“自己直面（対決）”を目指した心理面接を行うこととした。幸いに、本人の来談意欲も高いことで心理面接はスムーズに展開することが予想された。

## 2. 本人との治療面接過程

心理面接は、某年2月16日（初回受理面接）から、同年10月16日（#16）まで行われ、本人の申し出によって終結した。

本稿では、主題との関連で、本人（女性）—小動物（犬）—男性又は女性、本人（母親）—長男—小動物（ネコ）という三者関係に焦点づけて記述する。

#1（初回受理面接）：「事例の概要」のまとめのようである。それと共に治療契約が結ばれた。特に、面接場面では、気持が開かれていき、“楽”になっていくと同時に、自分自身に直面（対決）していかななくてはならない“苦”の面もありうることを強調した。

#2（2月19日）：「息子は関西のK大にする」「夫とのライバル——価値観の相違」「息子が狂いはしないか」。《以下、主題と直接関係しないときは「」のように一言表現にとどめる。》

#3（2月26日）：「息子の大学を決めた」「夫と慰安旅行を計画」「20年来の師<sup>エックス</sup>氏」「トイレの“夢”——気味わるい」。特に、この回では、20年来の師が多く語られる。自分にとって、信頼し、支えてくれた人（男性）で65歳の人がある。20年来の師で、獣医でありながら、教会員（無教会派）、絵画、折紙、写真、詩など何でもやれる人である。その人があって、今日の自分がある。自分はその人に、チン（犬）を診てもらったのがきっかけで縁になった。自分はその人に初めて泳ぎを教わった。その人は素裸で指導してくれた“信頼”の人であり、自分は主人に“不信”である。また変なトイレの夢もみた。何だかわからぬが、気味わるい感じがした。

筆者はこの回で登場してきたX氏を本人の理想的父親イメージとして注目し、かつまた“小動物”（犬）にも注目しておくことにした。

#4（3月15日）：3月11日、息子の大学のことで急に上京したCl.は、次回来談し、「息子はけっきょくK大に決めた」と語り、「夫との価値観の対立——一貫して世間的常識的生き方の夫と精神的人間的生き方の自分との対立」を語っていった。夫はX氏の生き方をとり入れている自分に「夢をみている（乙女<sup>おとめ</sup>）」と批判する。

#5（4月8日）：面接時間を一時間間違えて来室するが、出なおしてもらった。「（体重が）2kg増えた自分」「息子は関西O市で一人で下宿する」「自分の理想の家」「自分の弱点」。あれこれめめた挙句、けっきょく息子は親せきでなく、下宿に一人住居をするようにし、ホッとしている。息子に「お母さんはボクに似て、じっとしておれないタチだ」といわれる。自分はためることができない。自分の中にある2つの自分——外で肩意地を張る女性は嫌い。かといって家の中に居て折紙や手内職の

みしているのもどうかと思う。10年前に記したというザラ紙にヨレヨレになった「私の描く豊かな家」を見せる。

#6（4月16日）：「X氏にアドバイスされる」「犬が居て“孫”みたいだ」「（近所の）老人を家に招きたい——両親への罪滅ぼし」「自分の家風対主人の家風」。

今月末に、N市郊外のO市へ引っ越すと口火を切り、気ぜわしくしている自分を語る。“小犬”（シェットランド・シープ・ドック）を買ってX氏に診てもらったら、「アルバイトをやめて、家に居て主人や子どものめんどろをみろ」といわれた。自分は、人の為に尽したがる。新居に老人を招きたいと主人に確かめると、主人は賛成してくれた。

#7（4月23日）：「私は本を読むのが好き」「引っ越すが本も過去体験も捨てきれない」「自分の欠点の発見——しゃべりすぎと行動しすぎで挙句の果ては疲れること」。シルヴァシュタイン著（倉橋訳）『ボクを探しに』を面接者に貸してくれる。

#8（5月13日）：新居住地からの来室。「再び息子のことで混乱——大学をやめたいという息子」「自分に自信がない——‘母’として、‘妻’として、‘女性’として迷う」。

#9（5月27日）：「新築の家で夫の会社の部下や上司を招き、8回も接待したが疲れなかった——ホステスに徹した自分がよかった」「“アイデンティティ”が確立していない自分」「他大学受験をするという息子にイライラする」「自分の夫の“娼婦”のようだ」などが語られる。

#10（6月17日）：この間、Cl.の都合で2回休みがあった後、「息子への厳しい手紙——夫と自分から差し出す」「いま夫と一丸にならなくては息子がダメになる」「X氏との訣別——今まで魂を預けてしまっていた自分であった」「現実の自分への覚醒、そして自己決断」。今まで夫にわがままを言って、反抗ばかりしてきた。これからは息子の教育に夫と一致団結して当っていきたい。X氏とのことにうつつを抜かし、魂を預けていたように思う、“理想の我が家”は幻想であった。

#11（6月24日）：「この1週間食事がノドを通るようになった」「夫娼婦随が大切である」「息子は息子、私は私という自覚がでてきた」「新築の家に“門”をつけよう——今まで夫に不要だとたてついてきていた」。夫の側に寄りそうようになった妻（本人）は、夫に息子が「自殺するほど勇気はありはしない！」といわれて、“男親”の苦しみや我慢がわかるようになり、申しわけないと感じるようになる。

#12（7月10日）：「（夫方の）母が舞い込んできた」「息子のこと——夫の後輩が様子を見てきてくれた」「自

分の弱さ——“子離れ”できないこと。この回、夫の後輩が息子のところに行って様子をみてきてくれたことが語られる。(その前に電話が息子から入り、先に出した手紙を読んだかどうか母が確めると、「そんなもん知るか！くどくど書いて!」と怒っていたという。)後輩は、「浪人を2年もやって大学に入ったのだから、新学期4、5月はエア・ポケットに入ったようになるのは当たり前だ。」「あれで親父の手紙を読んで『ハイハイ判りました』というようではロクな子にならない」「9月になったら、まともに行き出すでしょう」と報告してきた。なお、下宿で息子は捨てネコを飼って孤独を癒している、との報告も受けたという。母親は以前のんびり過ごしたH市時代に、息子が病気のネコに湯タンポを入れて治してやったこともあることを、嬉々として語った。そして母親は自分の弱さ——今まで考えずに飛びまわっていたこと、その底には自分に経験がないものだから不安になり、つい先取りしてしまい“子離れ”できていなかったことを反省し、自分に目を向けていくようにしたいと述べる。

＃13(7月17日):「飼い犬をめぐって、母(夫方)と自分のちがい」「親としての存在感の確かめ」。この回の主要な話題は、母と飼い犬(シェットランド・コリー)の話をしている、自分の考えと違うことの陳述であった。

自分は犬を人間と同様に扱っている。犬も主人が仕事から帰るとまっ先に飛びついて行って気分転換させている。娘に対しても同様である。残り物でない、一人前の餌——トリ肉のカラ揚げ、コロケ、ミルクなど——も与えている。これに対して母は、犬を人間より下においている。母は家の中に入れることを嫌うし、食べ物人間の残飯で十分だと思っている。お金も節約する根性の人である。昔、母の家では、商売柄、荷車を犬に引かせていたぐらいで、犬を人夫として低くみている。

この回で、このCl.の小動物への愛玩具合が端的に語られていることがわかる。また犬が一家の道化役(トリックスター)的存在であることが語られていることがわかる。

＃14(7月29日):前回、9月まで面接は休むことにしていたが、突然電話で面接を依頼してきた。「息子の履習状況の通知がきて混乱している」「父—息子の関係が疎遠で、反発しあっている」「再び自分が子離れできていない」など語られていった。

＃15(10月7日):夏休み明けに面接の約束がしてあったが、この間3回ほどCl.の都合で欠席であった。

「自分の子離れのできなさ、心配になる自分」「知人のご主人とウマの合う息子——甘え上手の息子」「自分

はその知人のご主人の‘さびしさ’を聴いてあげている」「新居の近くの若夫婦(=息子と同年齢)の逞しさ、苦労や生きざまに目を開かせられる」。

＃16(最終回;10月16日):この回にCl.は開口一番「ほんとうに子どものことでスッキリし、自己確立しました」と述べ、10日(体育の日)に、息子のところに行ってきた色々話してきたら、スッキリしてきた、と美しい、落ちついた姿で語り始めた。一言表現では「息子とのことスッキリした——母親—息子とで両親(母方)の墓前で4時間話し合った」「息子は計画的に生活し、ネコもよく飼っており、よく太っていて安心した」「私は自己確立できました」といえる。

息子の下宿(アパート)は、母方の両親の墓の近くで息子は毎朝両親の墓に線香を供えていたことが判る。そして墓の前で息子と2人で4時間ぐらい話し合った。内容は、いま大学を停めるか停めないか決めないでおくこと、授業料後期分は家から納入すること、大学が気に入らなければTOEFLを受けて希望の国に留学すること、毎朝3時半に起床して新聞朝刊を200部配達していること、自分のかせいだお金で電化製品(ステレオ)を購入していること、“捨てネコ”を可愛がっていることなどであった。

特に、息子が語る自慢話として、“捨てネコ”はつぎのようになっている。「みすばらしかったネコを可愛がり、綺麗な毛並みにしている。ネコには名前はない。ネコも自分に安心し、クニャクニャにくっついてくる。」また母親自身も「息子にはネコぐらいが丁度似合っている。」「将来、ペット・ショップをやるため獣医学校に行きたければそれもよしと思うようになった」「せいぜいネコにワカモト(胃腸剤)を送ってやろう」と語った。

以上で、定期的な心理面接は、母親の申し出によって終結した。なおその後の経過を、若干補足しておく。

翌年4月に、息子は大学を継続していることを報告してきたが、クラブでハング・ライダーをわざわざやることで心配してきた。当方は、「やれといっても怖がってようやらぬ学生もいる当世で、本人自ら選んだクラブだからやらせてみたらどうか」とすすめた。なおネコの話を書いてみたが、「ネコはもう1月頃から消えていない。」とのことであった。ネコは、自ら引き時と感じて消えていったのであろうか。

### III 若干の考察

ここでは、目的に沿って、以下の2点について考察をすすめることにしよう。

## 1. 治療者の態度と視野の拡がりについて

成人女性との心理面接は、事例Cの場合のように娘の問題での来談であっても、事例Dの場合のように本人自身の問題での来談であっても、そこで話題になる対人関係の系や筋は、実に多岐にわたるものである。筆者は、かつてこのような系や筋を、整理したことがある（田畑，1977，1983）。それを図示すれば、図1のようになるであろう。

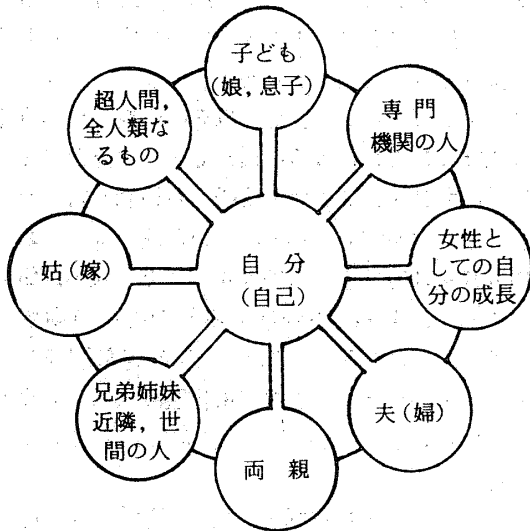


図1 成人クライアントへの心理治療者の目

ところが、今回の2つの事例にみられるように、子の親離れや親の子離れが主要テーマになる事例では、“小動物”が介在していることに気づかされる。これを図示すると先の図を修正して、図2が新たに考えられるのである。つまり心理治療者は、“波間に平等に漂う注意”や“一緒に心の旅をする心境”でもって、クライアントが一見何気なく語る話題としての“小動物”にも、心のアンテナを開けて、電波を受信することが必要なのである。問題の子どもの話題のみに焦点を合わせるだけでなく、親自身が語り伝えてくるあらゆる対人的関係、対物的関係に360°のレーダー網を張って、受信する態度が要求されよう。ただし、ここで留意する必要があるのは、“いま・ここで”語り伝えられつつある話題は、どの系やどの筋のものであり、どのような基本的感情が伝えられつつあるのかにも、同時に目を拡げて、心理治療者の内側に定位づけていくかも重要なことである。何でもかでも、聴いて開けていけばよいというものでないことは、言うまでもないことであろう。

また心理治療者の視野の拡大は、話題として報告される“夢”についても同様であり、前報（田畑，1985）で

事例Aに出現した小動物（ネコ）に対しても同様な態度で臨んでいるということができるのである。

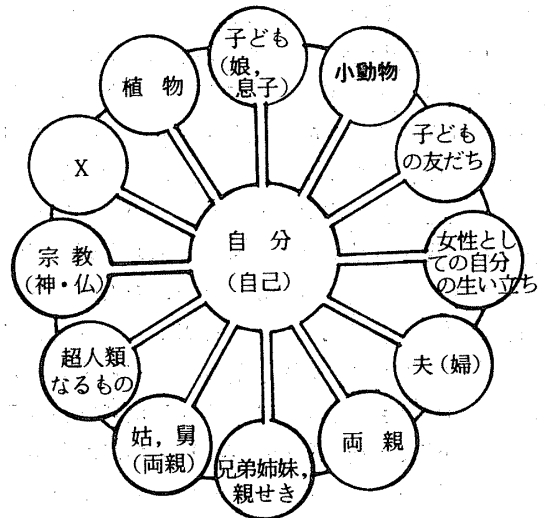


図2 事例C，Dにおける心理治療者の目

## 2. 心理治療過程に現われる小動物の治療的意義

前項で記述したような治療者の態度ならびに目でもって、心理治療過程で語られた小動物の治療的意義を考察してみると、以下のような点が挙げられる。

### 1) 親離れ、子離れの媒介物としての小動物＝ネコ

筆者は、事例Cでは、子（娘）が親離れをしていく仲介役として、シャム・ネコが美事な役を演じていると考える。すなわち、娘が自分で募集に応じて勤めはじめた店を両親にしゃにむにやめさせられたことを契機に、娘の家庭内暴力は2月に再発している。そしてその後、娘は4月にシャム・ネコを購入し、家庭内でシャム・ネコといるときの娘は「じゃれたり、遊んだりしている」のである（#2，#3，#4，#5，#8，#9，#10）。そしてこのように娘がシャム・ネコとすごしているとき、母親は一方で安定している娘を感じると共に他方でいつまでこの状態が続くか不安を表明していた。しかし#10#11（最終回）で母親自身気づいていったように、母親自身の完全癖の性格や枠組でもって娘に接して、娘がかえって負担を感じていたのであるとの洞察をしていった。これからいえることは、子ども（娘）は親離れをしようとしているのに、かえって親自身が娘から離れることに不安を感じていたのではないかと考えられる。シャム・ネコは、娘の親離れの媒介者（物）になっているといえないであろうか。

次に事例Dでは、CI. 本人が語っているように、受験期の男子青年の息子をもった母親の子離れが主要テ

マとなっている。この“筋”を読みとるには、母親自身がその両親から子離れを十分になしとげていたかどうか、も重ねあわせて考えねばならない。この母親は、#1で両親を相次いで病気で失っており、自分たちが不十分なケアの為に死なせた、という“罪悪感”にさいなまれているといえる。そして、その子離れの戦いを、受験勉強で疲弊し、意欲喪失した長男（息子）に同じように向けて、繰り返しているといえることができる。

ところで小動物（ネコ）はこの息子にどのような働きをしていたのであろうか。母親は、息子がかつてのんびりとすごしていたH市時代に、「病気のネコを湯タンポを入れてやって治したことがある」ことを語り、かつ下宿に「捨ねネコ」を飼い、可愛がっていることを語り、嬉々としている（#12）。そのような時の母親は、安定しているのである。そして、「自分が“子離れ”できていないこと」をしみじみ内省している。さらに#16（最終回）で息子と捨てネコとの関係を語り、「安心して任せられる」様子を伝えている。そして今後は、息子の飼っているネコに“ワカモト”（胃腸剤）を送ってやろう、との心の余裕さえみせている。したがって“捨ねネコ”は、親の子離れの媒介者（物）になっているといえるのである。

## 2) なぜ小動物はネコなのか

つぎに事例C、事例Dの親子分離・独立のテーマになに故にネコが登場してくるのであろうか。ここで、これらの事例に登場してくる犬との対比を試みてみよう。

木村喜久弥（1973）は、ネコと人間との関係についてつぎのように記している。

「病床に臥し、あるいは故国から遠く離れて孤独の生活をおくる人間にとって、その苦悩と寂寥から解放してくれるものは愛玩物である」（197頁）と述べ、昔からネコはその愛玩物として、航海者とともに船内に起居をとにもする機会が多かったことをいくつか例を述べながら記している。ネコは孤独な航海路を歩む人にとって必需品である。

それではネコと犬はどういう性質のちがいがあるのであろうか。

「ネコはイヌのように、飼主に媚びたり、お世辞を使うようなことをせず、非社会的、不遜で貴族的である。愛猫家は、そのようなネコの性格を好む。外向的、独裁者的、M的、そして最近の流行語でいう、ドライな性格の人がイヌを好むのに対し、愛猫家には、内向的で孤独を愛し、W的、そしてウェットな性格の人が多いようである。愛犬家には男性や政治家が多いのに対して、女性や文化人に愛猫家が多い。」（205頁）のである。

本事例Cの娘、事例Dの息子は、いずれも性格的に非

社会的で、内向的で、かつ孤独を愛する人たちである。対人関係、特に親密な友人関係に欠けるか、乏しい個人にとって、ネコのもつ性質は、まさにうってつけの愛玩物である。特に、事例Cのように愛・憎のアンビバレンスにさいなまれている家庭内暴力の個人、事例Dのように下宿でただ一人わびしい学生生活を余儀なくされている個人のように、情緒的に障害をきたし、孤独に陥っている人たちにとっては、ネコは最良の“親友”の代表者であったといえることができる。心理的に傷つけられ、人間同志の親友関係をつくりえず、社会に出立できにくく、かつ対決もしにくい状況では、ネコは不可欠の媒介者（動物）であることがわかる。

なお、事例Dでは本人（母親）自身は犬を愛玩していることが語られている。これは、上記の木村の説に従えば、自己確立というテーマと関連して、社会的、社交的であり、かつ男性的なものであると考えられる。そして本人自身の性格からしても、夫と価値観をめぐって対立的、対抗的であったことから、外向であったというふう考えられる。他方本人は、精神的な理想を追求したり、宗教に入信したりし、内向性格も共に摸索しつつあった。この状況で犬が登場し、後にネコも登場してきたことを想像するならば、十分に理解される。ただどちらかというこの母親本人は、その父親との分離・独立体験、理想化していた父親代理者（ないし男性）像としてのX氏との訣別体験、そして現夫との対立・摩擦から夫唱婦随への変化といった筋でいえば、犬のもつM的性格がピッタリであったというふうにいえる。

なお菅ら（1986）は、8歳の心因性視覚障害を主訴として来談した女兒の箱庭を通しての検討で、箱庭作品に擬人化された子ネコが登場する治療的意義を考察している。子ネコには「可愛がられるもの」「見るもの」「いたずらや遊びをするもの」「意識と無意識をつなぐもの」「現実には無力であるが、人を動かすもの」などのイメージが付与されていることを指摘している。箱庭の世界に登場する子ネコと、本研究で登場するネコとは性質がちがうが、内的世界や治療的意義を考えるうえで、参考になろう。

## 3) 対人関係への「移行対象」や「体験の中立領域」としての小動物

事例Cに登場するシャム・ネコの“ジョージ”，事例Dに登場する“捨ねネコ”は、それぞれ話し手（来談者）にとっても、聴き手（治療者）にとっても、ある種の安堵感、安心感および嬉々感を感じさせている。これらのネコの存在および振舞いは、あたかも人間でいえば姉・兄のいうなりに対応する“弟分”“妹分”であるようでもある。特に事例Cでは“ジョージ”と男性名がつけら

れているように、弟分であるか、遊び友達の男の子であるかのイメージを彷彿とさせてくれる。

しかしこれらのネコは、他方ではたとえば事例Cの#9で述べられるように母親と娘の対立に“板ばさみ”になって一晩行方不明になるくらい身の置き場に困ってしまった。そのくらい敏感で、賢明な反応をとっている。また#10でネコは怪我をして、娘が母親に協力を求める行動を起こさせ、母親にも素直に応じさせている。まるでネコは、家の中のことを知り尽した道化役者（トリックスター；Henderson, 1974 邦訳）であるかのようである。母親と娘の代理戦争の“犠牲者”であるようで、痛々しささえ感じさせる。特に事例Cの娘は、精神病理学的には、青年期境界例と考えられていただけに、家庭内暴力（Shimizu & Yasuda, 1983 のいう“Battered Parents Syndrome”）の現実に生じた犠牲は、ネコにまで及んでいる。このネコは、家庭の雰囲気の高圧感と安定さを示すバロメーターにもなっていたと考えられる。

また事例Dの捨てネコ（#12）は、息子が下宿に一人ぼっちでいるときは、慰安を与え、疲れの癒やしをし、自らもゴロンと息子の前に横たわる姿を示していた（#16）。しかしその後、母親からの電話で判明したところによると、息子が学生生活、とりわけクラブに加入する段階になると消えてしまっている。筆者の推測によると、この捨てネコは、息子が一人で孤独の下宿生活をする間は、弟分か妹分を演じ、息子が大学のクラブで仲間を得る段階になると御用済みと自ら身をひいて、再び捨てられることを察知して、消え去ったと思われ、憐れである。ここでも、このネコに、どこか道化役者（トリックスター）のイメージをもつことができる。先に引用した木村（1973）に記述されている南極観測の越冬隊のマスコットとして永田武隊長の名前をもらって、隊員たちから可愛がられた「タケシ」は、極寒地でやはり道化役を演じた末、帰国した。その後、作間敏夫通信士の家に引き取られて飼われることになったが、昭和33年5月に突然姿を消してしまっている。この「タケシ」の場合と、どこかこの捨てネコは一脈通じるところがあり、憐れである。ネコは自ら姿を消すことで、飼主に辞去しているのである。

近年、わが国でも注目されるようになった英国の精神分析学者 Winnicott, D. W. (1971) の対象関係論から、筆者は、つぎのようなことを仮説的に提起してみようとする。

年齢的に思春期、青年期に差しかかっている人たちの決定的な対人関係は、従来からたとえば Sullivan, H. S. (1953), Blos, P. (1961), Erikson, E. H.

(1959), 笠原 (1976) らによって指摘されてきている。

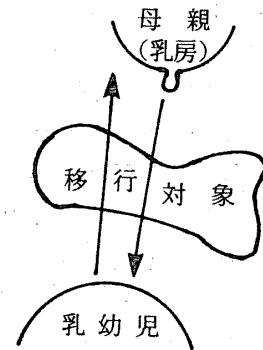


図3 移行対象 (Winnicott, D. W., 1971)

つまり思春期、青年期の人たちは、それまでの児童期の“遊び友だち”や少年少女の“同性同輩の遊び友だち”と異って、一対一の同性の“親密な友人”あるいは“異性の友人”を求め始める。しかるに、事例Cや事例Dのように親—子関係から友人関係（特に親密な友人関係）に移行しえていない娘や息子にとって、これらの良き相手となる対象に“小動物”が必要不可欠になるのではないであろうか。これらの“小動物”は、本人たちを親や友だちのように、非難したり、脅威にさらしたり、また決して傷つけたりはしない。むしろ“弟や妹”のように、慰めてくれたり、安心させてくれたり、安定させてくれる存在なのである。それは、Winnicottのいう、乳幼児が（乳房に象徴される）母親との間に、ある移行対象（transitional object）を与えられ、乳幼児はその対象に「おぼれるほどに夢中になっていく」ことを母親が期待していくことがらにも類比できよう。

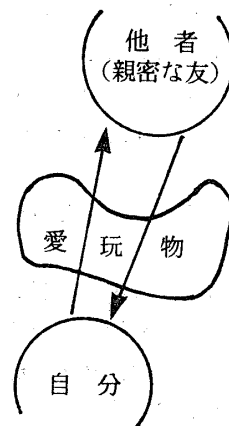


図4 「体験の中立領域」としての愛玩物

思春期・青年期の人たちにとっては、乳幼児の移行対象になるシーツや毛布は不必要である。むしろ、親でもない、友だちでもない、教師でもない、生きた、動く小



動物こそ、彼らの「体験の中立領域」(Winnicott, 邦訳 1971; a neutral area of experience)を構築しえるのである。筆者ら(田畑・伊藤, 1980)は、かつて思春期登校拒否児たちが、対人関係を再確立していく過程で、アルバイトを始めること、“働くこと”を契機として、自己確立し、立ち直っていくことが共通にみられることを指摘した。つまり彼らは、アルバイト先という(家庭と学校との)“中間地帯”で、周囲の人から批判されたり、脅威にさらされたりせず、社会の人たちの役に立っているという体験をし、さらに若干の収入を報酬として得ることで成就感や社会との生きた接触をしているという体験をしていることを論じた。

ここで取り出した「体験の中立領域」というのは、彼らがその正当性を問われることがなく、それ自体“小動物”を愛玩物として所有し、かかわり合うということの中に、安定を得たり、自己直面し、やがては親密な友への移行ないし発見ないしは世間の人びととの出会いや対決へ立ち向うことのできる対人関係の体験の“中間領域”を必要不可欠としていることを指摘するにとどめたい。

今日、いじめ—いじめられの問題をはじめ、自殺、家庭内暴力、非行等といった“攻撃感情”を底流とした教育病理現象が増加してきている。また家庭の崩壊、核家族化、夫婦離婚の増加という家庭社会構造の変化も進みつつある。本論文で述べたような、子どもにとってのかかる「体験の中立領域」はますます奪われつつあるといえよう。今後、他の事例についてもかかる意味での“小動物”のもつ治療的意義を検討していくつもりである。

#### IV 要 約

カウンセリングや心理療法では、主訴をはじめとしてそこで訴え伝えられる話題を、どのように受けとり、どのように伝え返していくかが重要である。そのことによって、来談者はよく理解されたとか聴いてもらったということによって自分自身への理解を深めたり、他者との関係を深めたりすることができるようになる。そこでの話題は、対人的関係の言及だけでなく、非対人的言及にも注意を向けつつ焦点を合わせていく必要がある。特に中高年女性の話題は、複雑で多岐にわたることが多い。

本研究では、中高年婦人の事例をとりあげ、特にそこで話題にされた小動物(ネコと犬)に焦点づけて記述し、あわせてこれらの小動物のもつ治療的意義を考察することが目的である。

本研究に用いた事例Cは54歳で既婚女性であった。家族は夫と娘・息子の4名であった。主訴は「娘の家庭内暴力について」であった。治療面接は、約9カ月に涉って行われ、11回で終結した。事例Dは44歳の既婚女性

であり、家族は夫と息子・娘の4名であった。主訴は「(自分自身の)迷わない生き方について」であった。治療面接は、約8カ月に涉って行われ、16回で終結した。

治療過程は以下のとおりであった。

1. 事例Cでは、家庭内暴力の娘が、家でシャム・ネコを飼っており、愛称を“ジョージ”と名づけていることが語られた(#1)。娘はこのネコと家でじゃれ遊んでいることを語るが、母親は盛んに心配をしていた(#3)。この頃平穏でかえって心配と語り、家ばかりにいるが兄とネコをなぶって楽しんでいること、娘は兄の結婚式に出たがらないで、ごねること(#4)。1カ月の空白の後の来室で、娘は相変わらず、家でネコの世話をした後は、ゴロゴロしていること、よそのネコが家に侵入し母親が取り押さえたら噛みつかれ、手に出血した。娘は心配し「医者に行け」と手当もしてくれたこと(#5)。娘が作っている布製品パッチ・ワークの完成に深夜までかかったこと、その中にネコが入ってちょっと寝ており、そういうときの娘はご機嫌であること(#8)。

安定した日が続いていたが、母親が些細なことで娘に注意したら、娘が怒ったこと、ネコに「娘を噛み殺してくれんかね」といってやったら、その晩ネコは行方不明になったこと。しかし翌朝、ネコは娘の部屋に戻ってきており、母親も安心したこと。娘は親友と旅行し土産を買って帰ってきたこと(#9)。兄の嫁が出産し、ネコが手にケガをし、娘は母親に協力を求めてきたこと、母親は自分の性格が完全癖であったことの洞察をする(#10)。娘は、兄の子どもにパッチ・ワークの<sup>マリ</sup>毯を作ると張り切ったり、父親(夫)と一緒に兄の子どもを見に行っている。両親の反省——娘に下手に出ることを語っていった(#11; 最終回)。

2. 事例Dでは、理想的父親像のX氏に犬(チン)を診てもらったことが語られる(#3)。また引っ越しをすることと共に小犬(シェットランド・シープ・ドッグ)を購入し、診てもらったら、家族に対する助言も受ける。犬を“孫”のように感じる(#6)。今まで夫婦は価値感がちがって対立していたが、夫婦一致団結して、不安定な、大学生の息子に当たっていかなければならないと悟る(#10)。息子は息子、私は私という自覚ができてきたこと、父親(夫)の苦しみが我慢に変ってきて、申し訳ない気持ちになる(#11)。

大学に入学したが、ほとんど登校していない息子が下宿で捨てネコを飼って孤独を癒していることが判った(#12)。夫方の祖母と自分との飼犬をめぐっての考え方のちがいが明確になる(#13)。息子の下宿を訪ねたら、息子が母方の両親の墓に毎朝線香を手向けている

こと、新聞配達をして計画的に生活をしていること、またあの捨てネコを可愛がり、綺麗な毛並みにしていること、ネコもすっかり馴ついて安心していることを語り、母親は“子離れ”できたと満足して帰った（#16、最終回）。

このネコは、翌年息子が大学のクラブ活動に入るとともに行方をくらましてしまった。

以上2つの事例の治療過程にもとづき、つぎのような考察を行った。

1. 治療者の態度と視野の広がりについて
2. 心理治療過程に現われる小動物の治療的意義
  - 1) 親離れ、子離れの媒介物としての小動物＝ネコ
  - 2) なぜ小動物はネコなのか
  - 3) 対人関係への「移行対象」や「体験の中立領域」としての小動物。

## 文 献

- Blos, P. 1962 *On Adolescence* New York : Free Press. (邦訳：ブロス, P. 著 野沢栄司訳 1971 青年期の精神医学. 誠信書房.)
- Erikson, E. H. 1959 Identity and the life cycle. *Psychological Issues*. Vol. 1, No. 1 New York : International Universities Press. (邦訳：エリクソン, E. H. 著 小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房.)
- Henderson, J. L. 1967 *Thresholds of Initiation* Wesleyan Univ. Press. (邦訳：ヘンダーソン, J. L. 著 河合隼雄・浪花 博訳 1974 夢と神話の世界——通過儀礼の深層心理学的解明. 新泉社)
- 笠原 嘉 1976 今日の青年期精神病理像 笠原 嘉・清水将之・伊藤克彦編「青年の精神病理1」弘文堂, 3-27頁.
- 北山 修 1985 ウィニコットの情緒発達理論——ウィニコットと私——. 精神ケース研究, 2, 1-21.
- 木村喜久弥 1973 (1977 4版) ねこ——その歴史・習性・人間との関係——. 法政大学出版局.
- Shimizu, M. & Yasuda, Y. 1983 Battered Parents Syndrome. *Proceedings of the 10th World Congress of Social Psychiatry*, Osaka : Japan, Pp. 262-263.
- 菅佐和子・中澤欽哉・大原 貢 1986 心因性視覚障害を主訴として来談した1女兒の内的世界——箱庭を通しての検討——. 季刊精神療法 第12巻 (第3号), 271-280.
- Sullivan, H. S. 1953 *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. New York : W. W. Norton & Co., Inc.
- 田畑 治 1977 成人の援助機能. 田畑 治・村山正治編「来談者中心療法」福村出版, 121-125頁.
- 田畑 治 1983 カウンセリングにおける基本的技法. 田畑 治「カウンセリング実習入門」新曜社, 208-227頁.
- 田畑 治 1985 児童期に母親喪失体験をもつ中年婦人のカウンセリングの特徴. 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——. 第32巻, 105-120.
- 田畑 治・伊藤義美 1980 臨床青年心理学研究 (V) ——思春期登校拒否と働くということの意義をめぐって. 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——. 第27巻, 88-97.
- Winnicott, D. W. 1971 *Playing and Reality*. London : Tavistock (邦訳：ウィニコット, W. D. 著 橋本雅雄訳 1979 遊ぶことと現実 (現代精神分析双書 第Ⅱ期 第4巻) 岩崎学術出版社. (1986年7月31日 受稿)

## ABSTRACT

THERAPEUTIC MEANINGS OF A THEME  
ON THE SMALL ANIMAL ("PET") IN PSYCHOTHERAPY

– In the cases of mother-child separation problems –

Osamu TABATA

In counseling and psychotherapy, it is essential that how a counselor or a therapist receive the client's complaints accurately and feed-back the understanding of the client fully. If so, the client become able to understand himself or herself and to deepen the relationship with others by experiencing to be deeply understood or listened to by the counselor. The counselor, therefore, must pay attention to the non-interpersonal referents as well as interpersonal referents. Especially the middle age women talk much about complicated themes including non-interpersonal referents.

In this study, the author aim to report the case of middle age women, describing specially about the theme of a "pet" (i.e. cat and dog), and to discuss upon the meaning of these "pets".

The Case 'C' reported in this study was a married woman of 54 years old. The family was consisted of her husband, daughter and son. The complaint was her daughter's "violence-in-the-family". The therapeutic interviews were continued about 9 months, and terminated at 11 sessions. The Case 'D' was also a married woman of 44 years old. The family was consisted of her husband, son and daughter. The main complaint of her was "the way of living without her being perplexed problems of life". The therapeutic interviews were continued for about 8 months, and terminated after 16 sessions.

Concerning to the two causes, the author discussed on the followings:

1. The counselor's basic attitude and the width of views.
2. The therepeutic meaning of a "pet" communicated in the therapeutic processes.
  - 1) A "pet" as an intermediary in the mother-child separation process.
  - 2) The reason why the "pet" must be a cat, not a dog.
  - 3) A "pet" as a "transitional object" (Winnicott, D.W., 1971) and a 'neutral area of experience' (Tabata & Itoh, 1980) to an intimate interpersonal relationship.